

小林秀雄著『本居宣長』：二十九章主題『此間(ここ)の言』(訓讀)の發明。その漢文の格(さま:漢文訓讀)からの脱出(『阿禮:誦習の古語』表記)こそが『古事記』その「關係論」的纏め。

P274:①『書籍(ふみ:漢書)』(物:場 C')②上代日本人(物:場 C')③『古事記傳』(物:場 C')④言語經驗(物:場 C')⑤上代文化(物:場 C')⑥『古事記』(物:場 C')⇒からの關係:『①と云ふ物渡り参來(まいき)て』幾百年の間、何とかして漢字で日本語を表現しようとした②の努力、惡戰苦闘と言つていいやうな經驗[とは、『此間(ここ)の言(訓讀)』の發明及び、P278『漢字は日本語(口誦のうちに生きてゐた古語)を書く爲に作られた文字ではない』の反省を指す]。これ(惡戰苦闘)を想ひ描く事が、⑨にとつては、③を書くといふその事であつた。⑨は、「⑦:上代人の、この④[上記『此間(ここ)の言(訓讀)』の發明及び、云々]が、⑤の本質を成し、その最も豊かな鮮明な産物[漢文の格(さま:漢文訓讀)脱出]が⑥であると見てゐた」(D1の至大化)⇒「⑧:上代文化」(⑦的概念F)⇒E:その『此間(ここ)の言(訓讀)』の複雑な『文體(かきざま)』を分析して、その『訓法(よみざま)』を判定する仕事は、上代人の努力[『此間(ここ)の言(訓讀)』の内部に入込む道を行つて、⑤に直に推參するといふ事に他ならない、と](⑧への距離獲得:Eの至大化)⇒⑨宣長(△粹):①⑥への適應正常。

P278:①日本語(物:場 C')②『古事記』(物:場 C')⇒からの關係:①に關する、⑤の「③:最初の反省[口誦のうちに生きてゐた古語が、漢文の格(さま:漢文訓讀)に書かれると、變質して死んで了ふ]が、②を書かせた」(D1の至大化)⇒「④:日本の歴史」(③的概念F)⇒E:④は、外國文明の模倣によつて始まつたのではない。模倣(漢文訓讀による漢文學習)の意味を問ひ、その答へ(即ち③)を見附けたところに始まつた、②はそれを證してゐる。宣長はさう見てゐた」(④への距離獲得:Eの至大化)⇒⑤日本人(△粹):①②への適應正常。

からの關係(D1の至大化)

*「『①と云ふ物渡り参來(まいき)て』幾百年の間、何とかして漢字で日本語を表現しようとした②の努力、惡戰苦闘と言つていいやうな經驗[とは、『此間(ここ)の言(訓讀)』の發明及び、P278『漢字は日本語(口誦のうちに生きてゐた古語)を書く爲に作られた文字ではない』の反省を指す]。これ(惡戰苦闘)を想ひ描く事が、⑨にとつては、③を書くといふその事であつた。⑨は、「⑦:上代人の、この④[上記『此間(ここ)の言(訓讀)』の發明及び、云々]が、⑤の本質を成し、その最も豊かな鮮明な産物[漢文の格(さま:漢文訓讀)脱出]が⑥であると見てゐた」(D1の至大化)。

*「①に關する、⑤の「③:最初の反省[口誦のうちに生きてゐた古語が、漢文の格(さま:漢文訓讀)に書かれると、變質して死んで了ふ]が、②を書かせた」(D1の至大化)。

